

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520280

研究課題名（和文） ステファヌ・マラルメの演劇論と「共和国」の関係についての研究

研究課題名（英文） Study on the relation of Mallarmé's theater aesthetic with Republic

研究代表者

中畑 寛之（NAKAHATA HIROYUKI）

神戸大学・大学院人文学研究科・准教授

研究者番号：70362754

研究代表者の専門分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：ステファヌ・マラルメ、演劇、フランス第三共和制

1. 研究計画の概要

本研究は「演劇についての覚え書」（1886-87）を出発点とし、『ディヴァガシオン』（1897）へと至るマラルメ演劇論の成り立ちを通時的に捉える視点を持つと同時に、それらの劇評が書かれ、演劇論として要約され、纏められ、また解体されるそれぞれの時期における、その目的・効果などを、同時代の演劇・社会状況やマラルメの演劇観の進展・洗練を視野に入れながら、共時的にも考えようとするものである。筑摩書房刊『マラルメ全集』における渡邊守章氏の仕事が詩人のテキストから抽出される「未来の祝祭演劇のパラダイム」を明らかにしようとする理念的なものへと向かっているのに対し、我々はあくまで実際に上演された（読まれた）作品との批評的格闘によって生成・展開するマラルメのエクリチュールに焦点を当てるとともに、「演劇についての覚え書」が濃厚に有する社会・政治批判的な側面を詩人の演劇論においても強調したい。「社会的矮小化の代償として<国家>に要求する権利」として演劇をみていたマラルメは、1885年以降ようやく機能し始めた第三共和制に対する期待と失望を、演劇の批評を通して、演劇の問題に限定して語っているのであり、その劇評には「犠牲の論理」を押し付ける国家、すなわちエルネスト・ルナンが指し示すような国民国家に対する人間としての正当な権利要求という側面があるのではないかと。そして、社会における演劇の必要性を詩人はどのように主張するのか。我々はマラルメの演劇論を単に美学的・哲学的にだけ読むのではなく、社会的・政治的にも読み得ると考えている。

2. 研究の進捗状況

1886-87年および90年代に書かれたマラルメの演劇評を同時代批評家の言説および戯曲テキストや図版資料等と付き合わせて読むことで、実際の芝居がどのようなものであったかをイメージしながら、実際に上演を観ている（もしくはテキストを読んでいる）詩人がどのような地点に批評的まなざしを向けているかを炙り出そうとした。他の劇評家がいかなる立場で記事を書いているのかを付度する必要があること、また入手できる文献の量と質が上演によってまちまちであることなど、すべてにおいて同じ質と客観性が保たれているとは言えないかもしれないが、少なくともマラルメの立場を相対化して考察することは出来ていると思う。特に当時の上演風景を描いたもの（イラストや版画）は、詩人が実際に観たであろう舞台の光景をイメージすることを可能にさせるという意味で、現場性・一回性を強く帯びる演劇上演の批評を読み直すうえで有効な補助資料であることが確認された。

また、マラルメの演劇観の進展とその社会的立場づけと彼の詩作（特にエロディアド詩篇）との関わりも考えることができた。

『パーリュ』および『詩と散文』のマケットについては、貼付けられている諸テキストがどの発表雑誌（あるいはどの校正刷）なのかの特定まではなかなか難しいと思うが、パリのジャック・ドゥーセ文学図書館での調査に基づき、その実態を生成批評版として纏めている最中である。これは複雑なテキスト編集を経ていくマラルメ演劇論の展開および自らの本を作る際の詩人の手つきを概観するために不可欠な資料となるであろう。

3. 現在までの達成度

③ やや遅れている (理由)

資料探査に関する困難、多くの文献を読み込む必要性に加え、個人的な理由（所属の変更、著書の出版など）により、成果を論文として纏めることがまだ出来ていないため。

4. 今後の研究の推進方策

資料を読みそれを整理することに、あるいは他の仕事に時間を取られ、これまでなかなか纏めることができなかつた考察を、論文として、ひとつずつ完成させていきたい。

第一に、エデン劇場の実体も含め、マラルメのバレエ論を再考し、ロイ＝フラーのダンス論への展望を示すこと。第二に、詩人が第三共和制における演劇の役割をどのように考えていたのかを「虚無」というテーマから明らかにすること。第三に、「演劇についての覚書」第1回末尾で予告されながら結局は最終回まで繰り延べされていた「<メロドラマ>における<音楽>の役割によって想起された研究を、<バレエ>に関する諸考察に結びつける」マラルメ演劇の夢想を考察し直すこと。以上の三点を軸に本研究の成果を示せればと考えている。

上演データ等、本研究のための調査成果については、少なくとも「演劇についての覚書」で論じられる1886-87年の上演に関してはデータベースとして公にし、マラルメ研究者の利用に供する。その他のデータは、マラルメ研究に関わるものもそうでないものもともに、研究機関終了後も随時追加更新していくつもりである。また、それらの資料を基にした論文も継続的に発表していきたい。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

① 中畑寛之、私は未知なるものを待っている — マラルメの『エロディアド』上演をめざして (2)、大阪音楽大学研究紀要、有、第47号、2008年、25-41頁。

[学会発表] (計2件)

① 中畑寛之、「神リヒャルト・ワーグナー」 — マラルメの<夢想>をめぐる、日本フランス語フランス文学会、2007年11月15日、関西大学。

② 中畑寛之、マラルメと第三共和制、マラルメ・シンポジウム2010、2010年3月23日、東北大学。

[図書] (計1件)

① 中畑寛之、水声社、『世紀末の白い爆弾 — ステファヌ・マラルメの書物と演劇、そして行動』、2010年、664頁

[その他]

ホームページ (関西マラルメ研究会アルシーヴ Mall'archives)

http://www.geocities.jp/mal_archives/